令和８年度 病害虫発生情報 第４号

令 和 ８ 年 １ ０ 月 ２ １ 日
千葉県農林総合研究センター長

ネギ葉枯病の発生状況について

１　ネギ葉枯病について

糸状菌（カビ）による病害であり、葉に黄色や褐色の病斑や、すす状のカビを生じる。本病の一次伝染源は被害残さである。葉枯病菌は土中で１～数年程度生存する。そのため、過去に本病が発生したほ場では注意が必要である。

病徴は、先枯れ病斑、斑点病斑、黄色斑紋病斑に区別される。

先枯れ病斑は、生育中期以降の外葉に発生し、先端７～８ｃｍ程度が褐変して枯死する。

斑点病斑は、葉身中央部にはじめ白色の小斑点が発生し、のちに楕円形の褐色病斑（写真１）を生ずる。本病斑は黒斑病の病斑と酷似しているため、正確な診断には検鏡により分生子の形状（写真２）を確認する必要がある。

黄色斑紋病斑は、収穫期近くの中心葉に、薄黄色～黄緑色の数ミリ程度の境界が不鮮明な斑紋が現れ、病斑部分はわずかにくぼむ。分生子の発生は少ない。

発生条件として、平均気温15～20℃前後の涼しく、長雨や曇雨天・多雨が続く時期に多発しやすい。

肥培管理において窒素肥料の過多で発生しやすくなる。また、低ｐＨで発生しやすい。

伝染経路は、残存した被害残さで越冬した病原菌が、翌春に胞子を風雨で飛散して伝染を繰り返す。





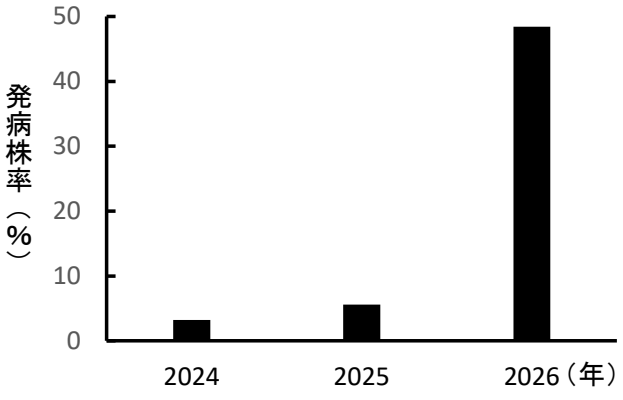


写真１　斑点病斑　写真２　分生子　　図　ネギ葉枯病の発病株率の年次経過（10月上旬調査）

２　発生状況

（１）10月上旬に行った秋冬ネギの県内10地点の巡回調査において、葉枯病の平均発病株率は48.4%であった（図）。

（２）気象庁による１か月予報（10月15日発表）では、気温は高く、降水量は多い見込みであり、葉枯病菌の感染好適環境が続く可能性がある。

３　防除対策

（１）　耕種的・物理的防除

ア　症状が出た古い葉や枯れ葉、被害残さはこまめに取り除き、速やかにほ場外へ持ち出し処分する。

イ　風通しを良くし明渠を掘り排水に努めるなど降雨後、過湿状態にならないようにする。

ウ　多肥や肥切れを避けて、適切な肥培管理に努め、健全な生育を維持する。

エ　土壌ｐＨを下げないように管理する。

（２）　薬剤防除

ア　発病適温でかつ降雨が予想されたら、発病前に予防剤を計画的に散布する。

イ　すす状のカビが出る前の発生初期に速やかに治療剤を７～10日おきに散布する。

ウ　防除効果を高めるため、展着剤を加用する。

エ　調査では黒斑病と葉枯病が混発しているほ場も見られたことから、下記（表）を参考に防除薬剤の選定をおこなう。

オ　ＦＲＡＣコードが異なる薬剤をローテーションで選択する。

表　ネギの葉枯病に対する主な登録農薬（2026年10月７日現在）

ＦＲＡＣコード※	薬剤名	葉枯病	黒斑病	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数
３＋Ｍ３	テーク水和剤	○	○	600倍	収穫14日前まで	３回以内
７	アフェットフロアブル	○	○	2,000倍	収穫前日まで	２回以内
７	パレード２０フロアブル	○	○	2,000～4,000倍	収穫前日まで	３回以内
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	○	○	3,000倍	収穫前日まで	３回以内
11	メジャーフロアブル	○	○	2,000倍	収穫前日まで	３回以内
11	アミスター２０フロアブル	○	○	2,000倍	収穫３日前まで	４回以内
Ｍ５	ダコニール１０００	○	○	1,000倍	収穫14日前まで	３回以内
Ｍ７	ベルクート水和剤	○	○	2,000倍	収穫30日前まで	３回以内

※　ＦＲＡＣコードとは、殺菌剤の作用機構の分類を表すものである。

注　農薬の使用に当たっては、最新の農薬登録内容を確認し、製品ラベルに記載された使用基準等を守り適正に使用する。

・病害虫発生予察情報はインターネットでもご覧いただけます。
https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/
・薬剤の選定については，最新の農薬登録情報を確認してください。
https://pesticide.maff.go.jp/

問合せ先
千葉県農林総合研究センター病害虫防除課
〒266-0014　千葉市緑区大金沢町 180 番地 1
TEL 043(291)6077　FAX 043(226)9107
E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp